

「テレビ語でかたる」

増田 研

地球に好奇心 (NHK-BS2) 2001年10月6日(土) 19:30-20:43

「少年は牛の背中を渡る～エチオピア・”強き男”への旅立ち」

共同制作：日本電波ニュース社 (NDN)、NHKエンタープライズ21 (NEP21)

プロデューサー：石垣巳佐夫 (NDN)

企画・コーディネーター：稲田定重

ディレクター (演出)：瀬川正仁

撮影：前川光夫 (NDN)

アシスタント・ディレクター：有光貴幸 (NDN)

アシスタント・ディレクター：堤幸子 (NDN)

編集：野島邦光

語り：岸本多万重 (NHK)

取材協力：増田 研 (神奈川大学)

企画段階

「地球に好奇心」は日本のテレビ界にあって数少ない本格的ドキュメンタリー番組である。現地取材にもとづいた素材を編集し、73分という破格の長さにまとめる醍醐味から、制作会社にとっても、制作意欲をかき立てる人気番組だと聞く。

私がこれに関わるようになったきっかけは、『季刊民族学』95号に掲載された拙稿「男として、牛の背を渡る」である。これをご覧になった稲田定重さんよりお電話を頂戴したのは拙稿が発表されてからほんの二三日後のことであった。

番組の話は有り難かったが、反面、懸念があったことも事実である。1993年、まだフィールドに入ったばかりの私のところに、アポイントメントなしでいきなり自動車三台で乗り付けてきた某民放局の記憶が残っており、テレビの人たちに私と村人との関係を壊されてしまうのではないかという心配がよぎったのである。(その後この局は、現在も続いている夜のニュース番組においてグレートリフトバレー

特集を組み、そのなかで1分ほどバナナの映像を用いた)。

先に述べたように、「地球に好奇心」は制作会社にとって一度は作ってみたい枠である。したがって通常は提出された企画書のうち5分の1が通れば良いほうなのだそう。そうした中であって、私たちの企画がすんなり認められたのは、テーマもさることながら、プロデューサーの稲田定重さん、および制作を請け負った日本電波ニュース社の実績によるところが大きい。テレビの世界もまた基本的には営業とお金の世界である。それでもやはり最終的に「良い制作会社」を決定づけるのは作品の仕上がりの良さであり、それを仕上げられるカメラマンやディレクターを抱えているかどうかである。その意味で今回同行されたカメラマンの前川氏、およびディレクターの瀬川さんはベテランであり、非常に安定感のあるスタッフ構成であったと思う。Aの有光さんは驚異的な手際の良さを発揮し、編集作業においても中心的な役割を果たされた。

稲田さんの番組コンセプトは、アーツァというバナナの成人儀礼をとおして、ひとりの少年が大人になってゆく過程を描くというものであった。そのためには取材期間中に是非ともアーツァをやらせてもらわなければならない。

アーツァは準備に時間のかかる儀礼である。当初2ヶ月という話であった取材期間は、スケジュールができあがった段階で3週間に短縮されてしまい、本当にアーツァを取材できるのか心配になってしまったこともあった。

他の多くの現地取材と異なり、今回はいくつかの点で有利な点があった。そのひとつ目はいわゆるロケハンが不要なことである。私が調査をおこなってきた村であるから、すぐに取材に取りかかれる。それと関連して、私を媒介にして取材チームの受け入れをスムーズにできるという利点がある。そして日本語からダイレクトにバナナ語に翻訳できる私という人間が同行したことがおおきい。私は企画の段階でいくつかの実際的な注文をつけたが、その一つが「取材をするなら私を同行させてほしい」ということであった。私なしでなじみの村に踏み込まれたのではかなわないし、編集段階で脈絡なしのぶつ切りのコマを見せられても翻訳などできないからだ。(実際に取材に同行してすら、帰国後の翻訳作業は難航したというのに・・・)

難問だらけの撮影

取材にあたって私に期待されたのは現地コーディネーターとしての仕事と通訳である。それに加えて帰国後には30分テープ94本の翻訳と監修という仕事が待っていた。

撮影期間が短いこともあり、ひとまず私が2週間先行して現地入りした。この期間中に私は、撮影の人たちがやってくることを村中に予告して回り、アーツァ(成人儀礼)の実施の可能性を探った。

さて、撮影班が到着してからは、予想もしえないことを次々と体験することとなった。私が最初に覚えたのは、カメラの画角の外にでるという基本的なことである。そのためテープが回っているときにはカメラがどこを向いているかに常に注意を払い、カメラの動きに合わせて走って逃げたり、地面に伏せたり、ヤブに隠れたりということを身につける必要があった。

インタビュアーは相づちを打たない、という鉄則

も存在した。相づちがまじると編集がしにくいからである。だが、撮影する側としては「インタビュー」「現地民の語り」であっても、私と彼らにとっては日常会話の延長である。身に付いたタイミングで相づちを打ち、お互いに言葉をはさみながら進めていくのが自然である。ところがインタビューではそれができない。私は「エー(ふーん)」とか「ニヤラシ!(なんてこった)」といった反応を飲み込みながら、相手の目を見てうんうん頷くだけになってしまい、「会話」はますます「インタビュー」的なものに硬直していつてしまう。

同様に撮影対象としての方が、カメラに視線を送ってしまうことも禁忌事項として徹底された。もちろんディレクターさんからの指示は「カメラは気にせず、普段通りにやってください」である。「普段通りに」というバナナ語表現を知らない私は、「カメラは何にもしゃべりませんから、見ないで結構です」などと言って人々に注意を促す。

こうした撮影にまつわる約束事の背景には、取材者は作品の中において主体となるべからずという前提がある。いわゆるカメラ・アイ、すなわち透明なカメラがつねに三人称の語り手として機能しなければならないという原則のなかでは、私の相づちひとつが物語行為を破綻させてしまうのである。

インタビューは通常、語り手の面前にカメラを固定し、ディレクターの瀬川さんが日本語で発した質問を私がバナナ語に翻訳した。私はレンズのすぐ横に陣取り、そばにはアシスタントの有光さんがマイクを構え、瀬川さんはカメラの背後に位置する。正直に言って、インタビューは苦痛だった。たとえば以下のような質問である。「いまどんなお気持ちですか」「いまアーツァを受ける少年に何をいってあげたいですか」「大人になるためにどんなアドバイスをしてあげますか」などなど。いずれもこれまで私が考えつきもしなかった質問ばかりである。もちろん日本語の脈絡において私は質問の意図がよく分かる。しかしそれをバナナの脈絡に置き直して、バナナ語で理解可能な形にロジックをほぐしていく必要があった。これは私にとっては訓練であり、試練である。実際、この手のインタビューは最後までうまくいかなかった。「牛の背を飛ぶということにはどのような意味があるのですか」という質問を私が「牛の背を飛ぶとはどういうことですか?」「なぜヤギではなくて牛なんですか?」といった微妙に異なる質問に変換しても、彼らから返ってくる答えは



撮影班の方々：向かって右からディレクターの瀬川正仁さん、カメラマンの前川光夫さん、アシスタント・ディレクターの有光貴幸さん。

「それが慣習だからだ」で終わってしまう。少年の母に「自分の息子がアーツァを受けることに対して、いまのお気持ちをお聞かせください」と問えば、答えは100%「うれしいよ」である。カメラの前でとうとう自分の考えを語って聞かせてくれたのは、一部の長老と、そしてキリスト教徒たちであった。自動的にしゃべってくれる方々に、心から感謝したものだ。

もうひとつだけ付け加えると、毎日のスケジュール調整も難問だった。限られた日数で効率よく撮っていくためには、こちらが撮りたい画と、あちらの都合とを調整をしなければならない。

たとえば、乳搾りの作業を撮りたいとする。瀬川さんが「それは何時頃ですか」ときく。バナナの人は、「朝早くだ」「暗くなってからだ」としかいわない。しつこく聞けば、腕をまっすぐに伸ばして空を指し示し、「太陽がこの辺まで来たところだ」と教えてくれるだろう。私はその腕の角度から時刻を推察し、なおかつ彼らの日常の生活ペースから算出される値を特殊な方程式に代入して、その解を瀬川さんにつたえる。こういう作業をとおして毎日の撮影スケジュールは決まっていたのだが、「予定」は往々にして大幅に狂い、待ちの時間がたくさんできてしまったりした。

実務的な面ではほかに、肝心のアーツァを手配するという仕事があった。これができなかつたら番組は成立しない。村の長老たちに諮り、候補者を推薦

してもらい、さまざまな便宜供与を提示してアーツァを急がせるという仕事である。

アーツァの準備は来客をもてなす酒造りが中心となる。酒造りに必要な数百キロの穀物を提供し、普通は女性たちがおこなう粉ひきも、穀物を自動車で粉ひき屋に持ち込んだりして時間短縮をはかったりした。発酵に要する日数と、取材班の滞在日数をにらみながら、ぎりぎりの日程でアーツァの日取りをきめたのは、残り日数10日という日であった。アーツァが開催されたのは私たちの滞在最終日である。

しかし、73分という長い放送時間を儀礼の紹介だけで終わらせるわけにはいかない。そのため少年の家族にまつわるあれこれを詳細に撮影する必要がある。日本の視聴者の興味をひくおもしろい番組に仕上げるためには、対象は一夫多妻家族であるほうが都合がよい。それも私たちの滞在するテントから近いところに家があり、できるだけ長時間つきあえる人であればなおよい。今回アーツァをしたオルゴという少年を、私は子供の頃から知っており、彼の割礼にもつきあった。父親であるボヤとも親しい間柄で、好都合なことにボヤの家は子だくさんの一夫多妻家族である。理想的な人選だったと思う。

テレビの文法

取材班の方々について印象に残ったことが三つある。一つ目は彼らがバナナ社会という、まったくはじめての社会に素早く順応し、なおかつ受け入れら

れようと積極的であったことである。しかも彼らは現地の文化に最大限の敬意を払い、人々のやり方を壊さないように注意していた。とくにADの有光さんは人々から大変に好かれ、まっさきにバナナの成人名（有光さんはボルディンバ：日焼けで皮のむけてしまった背中模様になむ）を与えられた。日本人でバナナの成人名を賜ったのは、分かっている限り私（ラロンバ）につづいて2人目である。ちなみに瀬川さんはソランバ（グレーの頭髮から）、前川さんはカッロンバ（黒いビデオカメラを牛に例えて）である。

この意味で、私が当初描いていた心配は、杞憂に終わったのである。

印象に残ったことの二つ目は、彼らのタフさである。朝は夜明け前から準備を始め、夜はバッテリーチャージのため11時頃まで仕事をしている。その上、昼間は重いカメラと、バッテリーと三脚と、もろもろの機材を担いで炎天下を歩いているのである。

三つ目は彼らが良い番組を作ろうと一生懸命であったことである。もちろん仕事であるから当然といえば当然であるが、それにしても妥協を許さないというか、一切ちゃらんぼらんところがなかった。報道出身の前川さんは、重いベータカムをかついで、テープを回しながら、少年と一緒に全力疾走したりした。（残念ながらこの映像は完成作品には使われなかったが。）何を中心的なテーマに据えるのか、どんな番組にしたいのか、どんな映像がほしいのかについて、彼らはいつも議論していた。もちろんスタッフ間の意見の相違や衝突がなかったわけではない。しかしそれもまた彼らの真剣さに起因するのである。

瀬川さんからのいくつかの指示に、私がへそを曲げたこともあった。たとえばインタビューにおいて、彼らが「うん」とか「はい」としか答えなかった場合、これでは番組では使えないので、彼らが自分の言葉で「語る」ようにと何度も要求される。少年がはじめて訪れた村で自己紹介する場面を撮りたいので、もう一度「最初の出会い」を再現してもらえまいかと注文を受ける、など。

この番組はドキュメンタリーではあるが、73分にとわって視聴者をひきつけるためには、ある程度のエンターテインメント性が求められることも事実である。結局のところ、これは生真面目な映像資料ではなく、テレビ番組なのである。もちろんテレビ番組

を見下すわけではない。視聴者から好意的に受け入れてもらいたいがためには、やはり番組制作の「型」にはめていく必要がある。

そう、テレビ番組にはそれ自体の「文法」が存在するのだ。その文法に民族誌的素材を当てはめていく作業が番組制作なのである。もちろんどのような文法をどの場面に適用するかはディレクター次第である。したがってディレクターが異なれば、できあがった作品はまったく違うものになる。私の仕事は、目の前に展開される現実に撮影の方々を誘導する一方、仕上がりや編集のイメージに合わせて「俳優」たちを指導することでもあったのである。

編集作業

帰国は2001年9月2日。さて、帰国後の編集作業である。

与えられた編集期間は、たったの4週間である。私は知らなかったが、この手の番組の編集に4週間というのは、あまりに厳しい日程なのだそう。放送日程は、当初は10月20日の予定であったが（それを聞いた稲田さんが、「それは早いですねえ」と言っていたのを懐かしく思い出す）、取材開始時点で10月13日になり、帰国途中でそれが10月6日に繰り上がったのを知らされ、編集が始まってみれば9月29日になっていた。じつに4週間も繰り上がったのである。実際にはアメリカでのテロ事件の影響もあって、10月6日に放送された。

編集作業における私の仕事は、何よりもまず翻訳である。テープをみながらリストアップされたシーンの翻訳を行った。ここで見せられるのは、整然としたインタビューではなく、むしろカメラのなかで人々が交わす日常会話の部分である。その会話がどのようなものか、それを判断し、タイムコードをみながらこまかく翻訳してゆく。

翻訳作業で気がついたことが三つある。

ひとつは、人間の日常会話がいかに文脈に依存しているかということだ。映像のなかでしゃべっている人々は、私たちに何かを見せようとか、説明しようとかしているわけではない。彼らの側で共有された文脈に従って会話を交わすのであり、それを知らない私が、その映像だけを見て翻訳するのはほぼ不可能である。

ふたつ目は編集する側が、バナナの人々の語りをかなり忠実に切り取ろうとしていたことである。日本人でバナナ=ハマル語が分かるのは、私を含めて

二人しかいない。したがって適当にダイジェストした翻訳を当てはめてしまっても、だれにも分かりつこないのだが、それでもバンナ語の語り（あるいはシナリオ）に忠実であろうとしていたのはたいへんに印象的であった。

そして三つ目は——個人的なことになるが——私がいかにバンナ語を分かっていないかを思い知らされたことである。

翻訳作業のほかには、内容に関するアドバイスをした。主にディレクターからの質問に答えるのが中心であったが、中にはなんと答えようがないものもあった。たとえば、なぜ牛の背をわたるのか、その理由を説明してくれと言われても、私にはまだ結論が出せない。それでもある程度の解答を用意しておかないと視聴者は納得しないので、私もいくつかの案をださざるを得ない。学問的怠慢を叱責されているようでもある。

ディレクターの瀬川さんおよび編集の野島さんの突貫作業のおかげで、帰国から3週間後の9月25日に3回目のプレビュー（試写）が行われ、構成についてのゴーサインがでた。これ以降、構成を動かすことはできない。私にはこの段階で最終構成案と台本がファックスされてきた。この段階で私が驚いたのは、かなり感情移入されたナレーションが用意されていること、そしてキリスト教徒の場面がすっぱり切り捨てられてしまっていたことである。

ナレーションについては、このような例を挙げておこう。数日後に成人式を受けるオルゴ君にたいして、自分が子供だったころのアーツァについて語った父親のボヤ氏。そのシーンの末尾にこのようなナレーションがつくのである。「いつも子供には強面のボヤさん、大事に育ててきたオルゴ君の旅立ちに自分の若い時代を思い出し、珍しく感傷的になります」と。

キリスト教の場面については、アーツァを受けない人々、バンナの習慣を捨てた人々ということまでぜひ紹介したいと思っていた。瀬川さんも同じ考えで、かなりの時間を割いて取材をした。そして編集に際しても、番組全体に厚みをつけるべく、礼拝やインタビューを中心に取り込む方針でいたのだが、最後の段階でプロデューサーによって「話が散漫になる」と評価され、削られてしまった。

これらの点については、私には一切権限がなかった。実際、仕上がりを見たところでは、最終構成案に対しておこなった諸々のアドバイスや訂正は、あ

まり反映されていたとは思えない。民族誌的な誤りもいくつかある。しかし私は現地コーディネーターであり、通訳であり、そしてアドバイザーに過ぎず、番組の構成やテキストについては発言権はない。

その点でも、これは民族誌映画とはいえないだろう。あくまでもエンターテインメントとドキュメンタリーの間である。本当に訴えたいことがあるのなら、自分で撮影して編集するしかないのだ。

終わりに

バンナおよびハマル社会については、すでに Ivo Strecker と Jean Lydall が、それぞれ多数の民族誌映像を発表している。成人儀礼についても Ivo Strecker が作成した記録映像があり、学術的にはそれで十分といえなくもない。Jean Lydall が英国BBC と共同で作成したハマル三部作は、映像の美しさ、テーマの一貫性、長期的な取材という点ですばらしい。私たちは半ば冗談交じりとはいえ、BBC を超える、というのを目標にしたものだ。

私たちが今回の作品を作ったことは、日本のメディアを使って日本語で紹介するという意味で、それなりの意味はあったと思う。ただ、私の責任として、できるだけ早く、この映像を現地の人々に見せるべきであろうとは思っている。番組そのものの著作権はNHKにあるそうだが（驚くべきことに、実際に制作した電波ニュース社には映像を公に使用する権利が一切ない）、協力してくれたバンナの人々にも、この映像に関して何らかの権利があると思うからだ。その権利がどのようなものなのか、出演者としての権利なのか、肖像権なのか、作品そのものについてどの程度の権利を主張できるのかなど、未解決の問題がたくさんある。私は、今回の撮影が「映像的略奪」にならぬよう、どのような始末がつけられるのかを考えると、重い課題を背負ったのである。

最後に、「テレビ語でかたる」という題にかこつけて、放映されたものをみた感想をひとつだけ。画面中の人々は、現地の私に向かって語ってくれている。ブラウン管を通してみている私は、画面の外にいてであろう私にむかって語っている人々と視線を合わせることができない。じつに居心地が悪い。しかも困ったことに、画面を見ている私は、彼らの語るバンナ語ばかりに耳がゆき、字幕をまったく見ていないのだ。

（ますだ けん 神奈川大学日本常民文化研究所）

Changing Identifications and Alliances in North-Eastern Africa

June 5-9, 2001. Halle/Saale, Max Planck Institute, Germany

増田 研

ドイツ東部の町Halle/Saaleで、2001年6月5日から9日まで開かれたConference “Changing Identifications and Alliances in North-Eastern Africa”に参加してきたので、ここで報告したい。オーガナイザーはIdentity on the Moveなどの著作で知られるGunter Schleeであり、この会議は彼がdirectorを務めるMax Planck Institute for Social Anthropology (以後、MPIと略する)の活動の一環として企画された。またこの会議は、その成果を出版することを前提に行われた。

Halle/Saaleという町の名は、Saale川沿いのHalleという意味だそうである。ドイツ国内には他にもHalleと名の付く町があり、区別のために川の名を付している。旧東側であるためか、あるいは経済的問題のためか、町中には無人の建物を多く見かけたが、緑の豊かな美しい小都市という印象を受けた。とくに繁華な地域は限定されているので、町中を歩いていると、会議の参加者たちと鉢合わせするということが何度もあった。

さて、今回は22名が研究発表を行った。発表者のうちほぼ半数が名の知られた教授陣、あとの半分が20代から30代という若い世代で占められた。ドイツからの参加者が多いのは当然として、他にもアメリカ、カナダ、イギリス、フランス、エチオピア、そして日本と多くの国からの参加を得ている。日本からは小馬徹(神奈川大)、栗本英世(大阪大)そして私の3名が発表を行った。

また発表者以外にもMPIのスタッフをはじめ、おもにドイツ在住者がオブザーバーとして参加しており、連日活発な議論が展開された、私(増田)にとっ

ては、ほとんどの参加者が知り合いか、あるいは名前を知っている方々であるかのどちらかで、そうした出会いの場としても(あるいは、出会いの場としてこそ)有意義であった。研究者が星の数ほどいる中で、招待していただいたことを私はとても誇りに思っている。

期間中、古城見学のツアーがあり、その帰り道には美しいSaale川をボートで上るというエクスカージョンも用意された。MPIスタッフの見事な係りプレーと参加者への気配りは見事であり、運営は完璧であった。

活発な議論

今回はそれぞれの研究地域が近接しているうえに学問的ディシプリンもそれなりに近く、なおかつ小規模な研究会であったために、それぞれの研究発表にたいする質疑応答や議論はたいへんに活発であった。書籍の出版を前提とした研究会ではあったが、招待者と関係者のみによる、どちらかというと非公式的な場であったからか、政治的な側面についての議論や情報交換も遠慮なく行われた。この点で、昨年国際エチオピア学会とはだいぶ異なるオープンな雰囲気を感じられたのは事実である。もちろんここでの議論を公にするにあたっての政治的な配慮についても検討された。

プログラムを見れば分かるが、Changing Identifications and Alliancesという課題に対する取り組み方はじつに様々である。現代アフリカというフィールドにおいては、「誰が、誰に、なぜ、どのようにして帰属しているのか」を読み解く試みは、私

たちに、どうしても歴史と政治を参照するように求めてくる。この会議で取り上げられたフィールドはエチオピアからスーダン、ケニア、ウガンダにまでひろがるが、いずれの場合も議論がエスニック・ポリティクスに流れる傾向は否めなかった。おそらくどこでもそうであろうが、やはり学問はヴィヴィッドな政治状況から逃れられないのだという思いを強くする。あるエチオピア人研究者は、いくぶん自嘲気味にこう語った。「社会主義の頃は1974年（革命前）までしか語れなかった。いまは1991年までは語れるけれどね」と。ある社会状況にアプローチするに際して、つねに歴史と政治を参照するのは回避できないなか、すでに終わってしまった政権についてしか語れない状況はあまり健全とはいえないだろう。しかし研究者もある程度は自分自身の身を守りたい。今回、私をふくめて、銃器の問題に言及した発表がいくつか見られたが、公にするにあたっては細心の注意が必要であるとの指摘をたびたび受けた。私のようにおもに日本において、日本語で活動している人間ですら、地雷を踏んでしまいかねないのである。

MPI について

最後に、会議を組織したThe Max Planck Institute for Social Anthropologyを紹介しておこう。MPIは79もの研究機関をかかえる大組織であり、そ

の社会人類学部門は1999年に開設されたばかりである。MPIはホームページも開設しているの、もちろん参照されたい (<http://www.eth.mpg.de/>)。

現在は4人の教授、18人の博士号保持者がProperty RelationsとIntegration and Conflictという2つのプロジェクトに分かれて研究を進めている。G.Schleeは後者の統括をしている。また、13人が博士論文を執筆中であり、ほかに外国からの短期研究員や事務スタッフなども抱えている。Halle/Saaleは旧東ドイツにあるが、研究者の多くは西側出身者だということだ。

MPIの研究環境はすばらしい。近々移転する新施設は2棟あり、それぞれにひとつずつのプロジェクトが入居するという。博論執筆組にも給与が支払われており、研究のための予算も潤沢であるという印象を得た。それぞれのプロジェクトには5年以内に成果を公表するという目標が設定されているが、スタッフに講義の義務はなく、研究時間も保証されていると感じた。

開設されたばかりの研究所でもあり、研究レベルについて云々する段階ではないだろうが、すでに多くの論文が発表されており、熱意の高さがうかがえる。なおこれらの出版物はウェブ上でも入手できる (<http://www.eth.mpg.de/pubs/pubs.html>)。

(ますだ けん 神奈川大学日本常民文化研究所)

CONFERENCE PROGRAM

Tuesday, June 5

Gunter Schlee (Max Planck Institute for Social Anthropology) *Opening address*

Wendy James (University of Oxford)

Journeys, networks and memories of place in a multiple frontier zone (Sudan-Ethiopian border)

Eisei Kurimoto (Osaka University)

Changing Identifications among the Pari Refugees in Kakuma

Wolde Selassie Abbute (Ernst-August-Universität Göttingen)

Identity, encroachment and ethnic relations: the Gumz and their neighbours in Northwestern Ethiopia

Dereje Feyissa (Max Planck Institute for Social Anthropology)

Identity politics in Gambella: Nuer and Anywaa

Wednesday, June 6

Jok Madut Jok (Loyola Marymount University)

A defensive peace: Reunification prospects between the Nuer and Dinka of South Sudan

Dereje Feyissa and Günter Schlee

A brief note about the Mbororo (FulBe) migrations into Ethiopia

Fecadu Gadamu (Independent Scholar)

Changing ethnicity and integration among the Kistane Gurage

Serge Tornay (Muséu, de l'Homme, Paris)

On identity and conflict: the nature of social ties and the emergence and / or the disappearance of the state (the example of the Nyangatom and their neighbours)

Elizabeth Watson (Newnham College Cambridge)

Changing networks of labour and land-holding in Konso, Ethiopia

Elise Demeulenaere (Muséum National d'Histoire Naturelle)

Forests (Mura) and Social Organization in Konso (Southwestern Ethiopia: Social Control of the Forest Heritage)

Ken Masuda (Kanagawa University)

The armed periphery: Memories of guns and warfare among the Banna in Southern Ethiopia

Tadesse Wolde (Max Planck Institute for Social Anthropology)

Taking land and making people: The state and the making of groups in southern Ethiopia

Thursday, June 7

Georg Haneke (Max Planck Institute for Social Anthropology)

Interfaces of power along a road in southern Ethiopia in the 1990s

Andrea Nicolas (Max Planck Institute for Social Anthropology)

Who is an Oromo? What makes an Amhara? - Memory, argument, power pools and ethnic mobilization in Eastern Shewa

Friday, June 8

Douglas H. Johnson (University of Oxford and James Currey Publishers)

The Nuer Civil War

Mustafa Mirzeler (Beloit College)

Sorghum as a historical metaphor: Jie identities through time

Sandra Gray (University of Kansas)

Sticks and spears, guns and gunships: violence and pastoralist identity in Karamoja

Hermann Amborn (Ludwigs-Maximilian-Universität München)

Burji: Versatile by tradition

Toru Komma (Kanagawa University)

Nationalism and sub-nationalism in Kenya: With particular reference to Kipsigis and Isukha

Getachew Kassa (Addis Abeba University)

Gari/Boran alliances and conflicts up to 1991

Günter Schlee (Max Planck Institute for Social Anthropology)

Ethnic and religious identities in the recent Gabbra/Garre/Boran conflict

Saturday, June 9

Ruth Klein-Hessling (University of Bielefeld)

Negotiating death in a Sudanese village

Janice Boddy (University of Toronto at Scarborough)

Alliances and endogamy: Extending identity and enclosing it in riverine northern Sudan

Güther Schlee (Max Planck Institute for Social Anthropology)

Summary and future research perspectives